

學士會会報

第959号

会 報 第九五九号 目次

中間選挙後の米国政治・経済と国際秩序の行方（十一月午餐会講演）……………菅野 幹 雄…4 頁

米中対立の構造的背景と日本の役割……………佐 橋 亮…15

新しい「国家安全保障戦略」と今後の日本の課題……………徳 地 秀 士…20

不安定化する日本政治……………牧 原 出…25

日本の半導体産業の凋落と復権のための要件……………長 内 厚…30

新たな「記録文学」は生まれるのか……………沼 野 恭 子…36
— 最新ロシア語文学事情……………

台湾における日本文化研究の現状と成果……………徐 興 慶…42

〜随想〜 人生は思いがけない出来事の連続である……………伊 東 豊 雄…48

私のスピントロニクス遍歴（十月夕食会講演）……………大 野 英 男…51

麹菌の持つ無限の可能性（十一月夕食会講演）……………小 泉 武 夫…65

ダニと人のくらし……………島 野 智 之…75

高性能レーダの開発と「雨雲どこなビ」の公開……………牛 尾 知 雄…82

「——6 物語」……………岸 本 忠 三…86
— 関節炎からCAR-T細胞治療そしてCOVID19 —……………（十月午餐会講演）……………

がん登録情報の標準化の経緯と成果……………祖 父 江 友 孝…97

◎宇宙の言の葉を尋ねて 第二回……………渡 部 潤 一…103
ブラックホール — 宇宙の特異点 —……………

◎学会館物語 第一回……………藤 岡 洋 保…108
学会館の建設経緯とその建築史的評価……………

会 員 ひ ろ ば ……（事務局編）……………113

草 樹 会 詠 草……………	新 会 員 氏 名……………	118	141
短 歌 会 詠 草……………	学会会からのご案内……………	120	142
裁 錦 會 詩 草……………	講演会の申込方法……………	122	147
同 好 会 だ よ り……………	事務局 から……………	128	148

台湾における日本文化研究の現状と成果



徐 傑

一、台湾における日本研究の概況

日本と台湾は、一九七二年の国交断絶後も、経済・文化・教育各分野におけるつながりは途絶えることなく、今日に至るまで密な交流が続けてきた。一九六〇年代以降、台湾の大学では日本語教育が実施されはじめ、二〇二三年一月現在では台湾に日本語文科、応用日本語学科を持つ大学は約四十校にのぼる。さらに日本研究センターを設置している大学も十四校に及んでいる。しかし、こうした日本語教育のめざましい発展の一方で、日本研究の一環としての「日本文化研究の成果」という理想には、依然としてほど遠いのが現

状である²。こうしたなかで、各大学の日本研究は今後どのようにして発展していくべきなのであろうか。今日の日台交流が直面している問題点を検討し、日本文化の深層やその民族・国家への理解や多領域での日本研究を深化させ、人材の育成などを図らなければならぬ。これは一刻の猶予もできない解決すべき課題である。

台湾では、日本文化史や日本思想史のような学会³はないが、これまでの台湾日本研究学会（一九七九）、台湾日本語文学会（一九八九）、台湾日本語教育学会（一九九三）、台湾応用日本語学会（二〇〇二）などの学

術活動の中に、日本文化の研究と成果が含まれている。以下、筆者が携わる台湾の日本文化研究の現状と成果を下記のようにまとめてみたい。

二、日本文化の教育普及

1. 台湾から見た日本文化の知識教養

1.1 『日本文化』の刊行

台湾の大学生に適した日本文化の通史的な教材が不足していることに鑑み、二〇一〇年に筆者は現在台湾の各大学の第一線で日本文化の課程を担当する教師八名（日本人を含む）ほどが集まり、一年間余りの意見交換を経て、学習者の印象を深めるために「概要」「学習の焦点」「台湾と日本の比較」の項目を設け、古代、中世、近代、現代という時代構成による「日本文化」の教科書を共同編纂で公刊している。本書は台湾の読者のニーズを考慮して、他の同種の教科書に比べて台湾の視野から日本文化の要素を考えることが多く、筆者が言及した日本文化の基本型も各章の内容に反映されている（図1）。

1.2 『台湾から見た日本事情』のシリーズ

日本語を勉強する上で「日本事情」を知ることが大変重要なことである。日本では「日本事情」に関連する書籍が多く出版されているが、台湾の視点から書か



図1 『日本文化』の刊行

れた書籍は乏しいので「台湾事情」を取り入れつつ「日本事情」を外から見て深く分析することを目指した。本シリーズの執筆者は計三十九名の教師（日本人を含む）になり、「言語・文化篇」、「生活・社会篇」、「地理・歴史・宗教・思想篇」の三冊によって構成し、二〇一八年から逐次出版の計画に取り組んだ。その内容は「台湾事情」と「日本事情」とは歴史的背景が密接に関わることを重視し、多くの日本語学習者に「台湾の視点から台湾文化を理解した上で、日本文化を理解してもらう」ことを目的としている（図2）。

積極的に切り拓き、学際的にして国際的な方向に視野を広げていく若手研究者の養成を期すこと。

3. 日台両国の関連研究機関および東アジアの諸研究機関との連携を促進し、日本研究を国際的に展開する「国際日本学」の構築を目指すこと。

4. 世界における日本研究の成果を生かした「国際日本学」のもと、台湾固有の文脈を意識した台湾的特色のある国際的日本研究の発展を推進すること。

二〇二三年一月現在、計三十六巻の叢書が刊行されている⁴（図3）。

結語に代えて―今後の展望と課題

新型コロナウイルス感染症の拡大は日本だけではなく、地球全人類の健康、安全を脅かし、さらに世界各国の経済発展が影響され、医療問題まで次々と危機を引き起こした世界的不況の余波が及んでいる。こうした時代の趨勢に対応するためには、今や私たちは、先駆者らがその基礎を確立したこれまでの日本語教育の成果に立脚しつつ、台湾の日本文化研究の人材育成という課題に真正面から取り組まなければならない段階に至っているであろう。

日本文化の深層やその民族性への論議は、台湾にとっては、いわば「採長補短」のことと言えると思わ



図2 『台湾から見た日本事情』のシリーズ



日本学研究叢書

2023年1月現在、既刊36巻

図3 『日本学研究叢書』の発刊

三、『日本学研究叢書』の発刊

二〇一二年に国立台湾大学人文社会高等研究院「日本・韓国研究平台（プラットフォーム）」の開設を機に、筆者はその執行長を務めながら、唯一、台湾における日本語による学術研究書「日本学研究叢書」の出版を企画した。戦後、国立台湾大学が旧台北帝国大学から受け継いだ日本研究に関する文献は膨大であり、また貴重なものである。そうした遺産のもと、台湾における日本研究は長い歴史と伝統をもっている。しかし、東アジアの全体を見渡すとき、日本、中国、韓国などの国々の日本研究は、それぞれに特色のある内容を展開しているなかで、台湾における日本研究は、その長い歴史と一定の実績の割には、日本語と文学研究に重心があり、現代の諸課題や日本文化を視野に入れた社会科学分野と切り結んだ研究と対話は十分ではない。むしろ欠けているといえるだろう。本叢書は、グローバル化が進むこの二十一世紀に、日本研究における台湾のもつ大きな潜在力を自覚し、その喚起を目指して、以下の四つの目標の遂行に努めている。

1. 人文学だけではなく、社会科学分野における台湾の日本学研究を強化し、両者の対話と融合を目指すこと。

2. 台湾における「日本学研究」の新たな学習環境を

れる。歴史的経験の吸収と補完は日台関係の発展を可能にし、加えて東アジアの地域安全にも寄与する。日本研究は、本来「地域研究」の範疇に属している。それは現在の東アジア国際社会において最も必要とされ、東アジア地域内での各国の相互補完的な研究によってそれは推進される。この意味において、台湾でも、日本研究における位置づけを明確にする必要がある。

1. 知日人材の必要性

思えば日本は台湾と多くの共通点をもつ。いずれもアジア大陸の東に弧状に連なる島国であり、地震多発地帯でもある。災害救助、医療、少子高齢化、環境汚染といった社会問題も共有できる。また航路や漁業や原子力発電に関わる資源も共通の利害を有しており、あらゆる問題で交渉を必要とし、そのための人材が欠かせない。日本を深いレベルで十分に理解する優れた人材の輩出が、官民問わず求められている。それは、迂遠に見えて実は喫緊の現実的課題であり、私たち日本研究者が自覚的に認識すべき責任でもある。日台関係の発展を、研究と教育を通して支えていくこと、それが私たちの使命であるといえる。換言すれば、私たちは日本語教育を豊かに蓄積してきた先人の成果を土台に、台湾から発信する日本研究の発展と、台湾的文

脈に立脚した人材育成の教育に正面から取り組まなければならぬ。

2. 共同研究のモデルを模索する

日台双方の学者の関心は、自らの歴史評価やアイデンティティ、社会の変遷と国際社会との関連性、ひいては東アジア日本研究が担う役割や努力すべき方向という問題である。将来の日本文化研究テーマの領域は多様化するであろうと思われる。筆者は、マクロな視野からの論点の発見と共同研究によって、量の拡大から研究人材の整合、そして共同認識の形成へと展開するためにある種のモデルが必要であると考えている。このモデルがあつてこそ、質の向上へと駒を進めることが出来るにちがいない。つまり私たちは、台湾の日本研究の足がかりと発展の方向性を見出さなければならぬのである。

3. 世界に開かれた台湾の日本研究

台湾に開かれた台湾の日本研究は、本来「地域研究」の一端を構成する。言い換えれば台湾における日本研究は、東アジア国際社会研究の重要な環を構成している。それはもとより「日本一国」研究に完結するものではない。東アジア地域内の諸研究と連携し、担うべき相互

補完的役割を意識して、台湾だからこそ実現できる日本研究の発信が可能となり、世界に開かれた日本研究を目指す必要がある。私たちはそれを通して、日本も含めた世界の日本研究に独自の役割と位置を占めることが可能となる。

1 徐興慶「台湾における日本研究—過去、現在、未来」、『アジア・大洋州の日本研究事情』、国際交流基金、二〇二二年、pp.33-42。

2 徐興慶「台湾的日本研究之發展及其問題點」、『亞太研究論壇』第二十六期、中央研究院、二〇〇四年、pp.35-67。徐興慶・太田登共編『国際日本学研究所の基層—台日相互理解の思索と実践に向けて—』（日本学研究所叢書一）、台湾大学出版社センター、二〇一三年、pp.1-15など併せて参照されたい。

3 台湾における日本思想史、教育史研究の事情について、田世民「台湾における近世日本思想史・教育史研究の現在」、『日本教育史研究』第四十一号、日本教育史研究会、二〇二二年、pp.79-95が詳しい。

4 徐興慶「世界に開かれた台湾の日本研究」『特集 日本研究の過去・現在・未来』、国際日本文化研究センター、International Research Center for Japanese Studies 55、二〇一七年、pp.117-130。

（東呉大学講座教授、元台湾大学教授／元中国文化大学学長、九大・文博・平4）

オアシス介護

老人ホームのご相談事は
オアシス介護におきかせください

ホームページはこちら



ご相談に費用はかかりません！

0120-512-551

【受付時間】9:00～18:00（平日のみ）

シニアが憧れる生活の実現を
サポートいたします

- ＊ 社交倶楽部の活動で輝ける毎日
- ＊ ホテルのような快適な空間
- ＊ 健康に配慮した上質な食事
- ＊ 地域の医療機関との密接な連携
- ＊ 専属の看護師による健康管理



株式会社 ハートメディカルケア 東京都千代田区神田神保町 2-4 太平電業第2ビル 5F